

三商レポート

第六十八話 「50歳になったら相続学校(*)」

相続プラザ 花小金井 (株)三商 内藤 雄

小平市花小金井南町1-14-24 電話 042-467-2103

E-mail sansyo@trust.ocn.ne.jp <http://www.souzokusoudan.net>

多くの人は、相続のことを知りません。当然です。教わっていないからです。読み・書き・計算の基礎は、義務教育の小中学校で教えてくれます。しかし、相続のことは誰も教えてくれません。基礎知識すら学ぶ場がありません。また、相続を体験する機会も多くありません。そのため、相続の本質や相続での大切なことを気づかないまま相続を迎えます。その際、断片的な知識を誤解し、自分に都合よく考えてしまいます。そこから相続争いが生じます。

多くの人は、「財産を承継すること」が相続だと考えています。ここでの「財産」とは、土地・建物・株・現預金などです。親は、こうした財産を子に継がせることと考えます。子は、親の財産をもらうことと考えます。しかも、もらうことを当然の権利と考えます。相続財産の6～7割を土地が占めています。土地は分けにくいので争いとなりがちです。現預金でも、多い少ないと比較して争います。そこで多くの人は、財産分けでもめないでほしいと願い、「遺言書の書き方」をセミナーなどで学びます。そして、遺言で分け方の指定をします。相続人になった人は、もし財産分けでもめたら弁護士さんを見方につけます。税金が心配な人は、税理士さんに節税をお願いします。こうして、相続といえば財産承継に伴う「分け方」と「税金」に関心が集まることになります。

しかし、相続の本質は、亡くなった人(親)の生き方・人生観・価値観などを受け継ぐことにあります。目に見える財産は「おまけ」です。財産はなくても、借金のほうが多くても、その人が一生懸命に生き抜いてきた姿に意味があります。その人の生きざまを見つめ、ねぎらい、感謝し、自分自身の人生に活かす。そして、これからの自分自身の生き方・人生観・価値観を築きあげていくことがなにより大切です。

個人差はあるものの、50歳になると親は80歳。そろそろ相続を迎える時期です。子供はそろそろ独り立ちする頃です。しかも、自分自身の人生にいろいろな問題を抱えている年代でもあります。この頃になると、親の人生を思い、親の相続を考え、親への感謝の気持ちと自分自身のこれからの人生を考え始めます。そして大切なことに気づき始めます。気づかない人たちが、相続でもめることとなります。それも実は必要なことかもしれません。親の死を通して、大切なことを気づかせようとしてくれているのです。人生修行のためには、相続争いにも意味がありそうです。

50歳になったら、相続学校に入学してみませんか。これからの人生をより良く生きていくために。相続を学ぶことは、「死ぬこと」と「生きること」をセットで学ぶことです。そのため、入学すると生涯勉強が続きます。相続学校には、留年はあっても卒業はありません。死ぬ時が卒業式です。

(*)「50歳になったら相続学校」は、NPO 法人相続アドバイザー協議会の芳賀則人理事長が提唱しています。

(2010年2月1日)

～いつも「三商レポート」をお読みいただきありがとうございます～